

# 蒼洋の城塞 1

ドウリットル邀撃

横山信義

*Nobuyoshi Yokoyama*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之  
地図・図版 安達裕章  
編集協力 らいとすたつふ

目次

序章

9

第一章

房総沖海戦

17

第二章

第二段作戦

73

第三章

遠い波紋

95

第四章

珊瑚海の激突

113

第五章

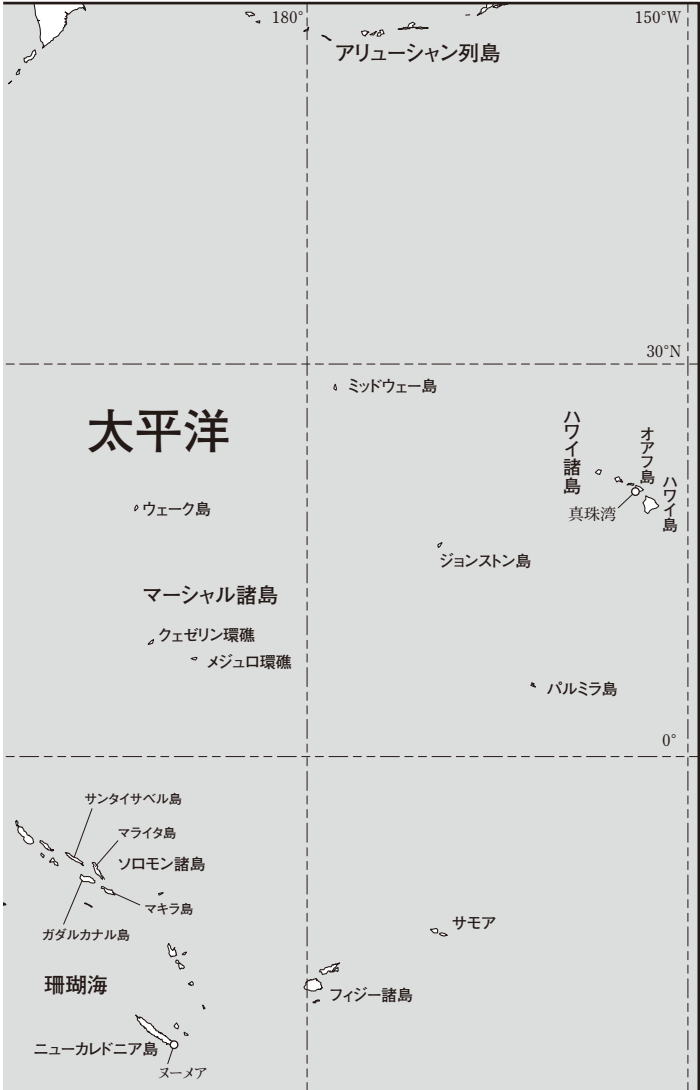
モレスビーの門衛

171

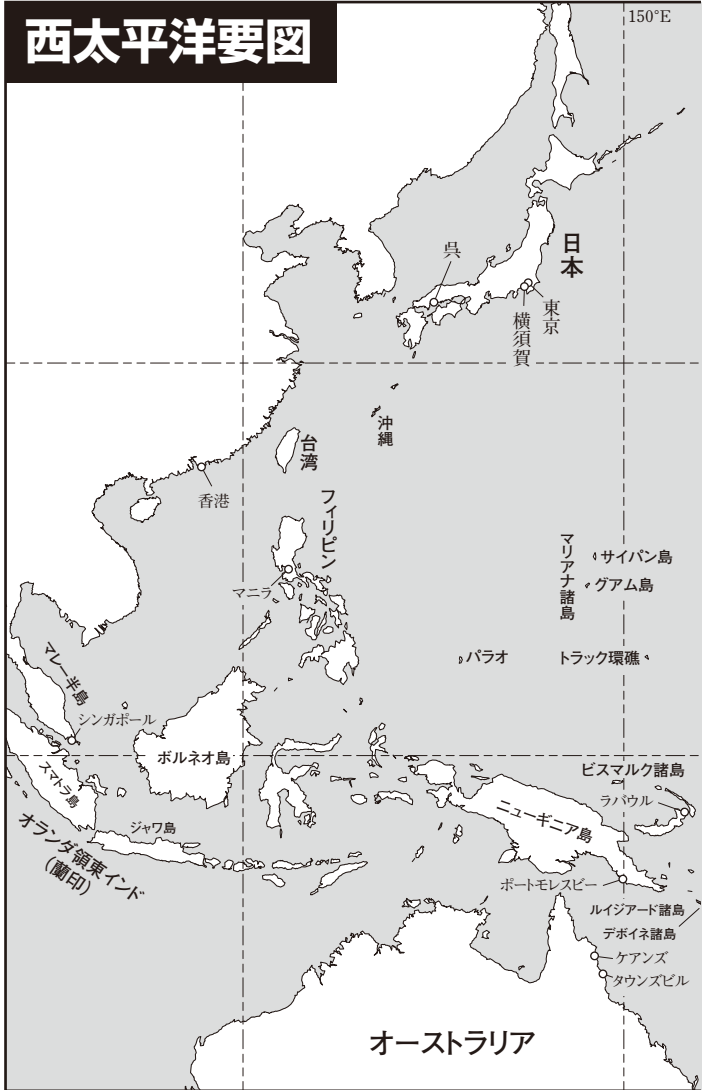
第六章

ラバウル発至急報

233



# 西太平洋要図



# 珊瑚海周辺図



ソロモン海

珊瑚海

南太平洋

# 蒼洋の城塞

ドゥリットル邀撃

# 1







# 序章

横須賀海軍工廠六号ドックの中に、それはあつた。

船の背骨とも言ふべき巨大な竜骨や、縦通材、肋材は、舷側に張り巡らされた分厚い鋼鉄の内側に隠されている。

船の内でも、外でも、多数の作業員が持ち場に取付き、溶接やリベットの打ち込みに伴う火花があちこちに飛び散っている。

巨大な軍艦の建造に伴う金属的な喧噪が、工廠内に満ちていた。

特筆すべきは、艦の大きさだ。

ドックの大きさは、長さ三三六メートル、幅六七・五メートル、深さ一四メートル。

「あまりの大きさに、吸い込まれそうな恐怖を感じた」

と、工廠に着任したばかりの、ある士官が語った

ほどだ。

艦は、そのドックの大半を占有している。

前後は余裕があるが、左右の最も太い部分は、内壁との間隔が一四、五メートルほどだ。

既に出上上がった部分を見ただけでも、完成時の大きさが想像された。

「こうして見ると、想像していた以上にでかいことが分かるな」

ドックの床面で、丈高い舷側を見上げながら、横須賀海軍工廠長の都築伊七機関少将は、賛嘆の思いを込めて呟いた。

ドックの上から見下ろすよりも、下から見上げた方が、艦の巨大さが実感される。

多数の盤木に支えられた艦体は、上からのしかかろうようであり、穂高岳や谷川岳の絶壁を連想させる。

外板が緩やかな曲線を描いて、艦の後部まで延びる様は、鋼鉄製の長城さながらだ。

「呉の工廠長や三菱長崎造船所の所長も、同じよう

な感想を持ったことでしょう」

造船部長渡辺隆吉大佐の言葉に、都築は応えた。「呉の連中は特に、だろうね。このクラスの艦を、最初に建造したのだから」

この艦に、名前はまだない。現在の呼称は一一〇号艦。

帝国海軍が、世界最大最強の戦艦として建造した大和型戦艦の三番艦として、昭和一五年五月に起工されたものだ。

一番艦「大和」は既に竣工し、今年——昭和一七年二月より、連合艦隊旗艦の任に就いている。

二番艦「武蔵」は今年八月の竣工を目指し、三菱長崎造船所で、艤装工事の真っ最中だ。

大和型戦艦を最初に建造した、呉海軍工廠の工廠長や各部の部長、建造に携わった数千の作業員も、完成が近づくとつれ、その大きさに目を見張ったことだろう。

「『大和』や『武蔵』と共通するのは、下半分だけ

ですがね。何しろ、艦種が違うのですから」

造船部長の斉尾慶勝大佐が、どこか皮肉っぽい口調で言った。

一一〇号艦は、戦艦として竣工することはない。昨年一二月、戦艦から空母への艦種変更が決定されたのだ。

開戦劈頭の真珠湾攻撃と、その二日後に生じたマレー沖海戦で、戦艦に対する航空機の優位性が明らかになった。

強靱な防御力を持ち、対空火器を所狭しと積んだ最新鋭戦艦であっても、多数の航空機による雷爆撃を防ぐことはできず、沈められてしまうことが、実戦の場において証明されたのだ。

二つの戦闘の結果を巡って、海軍中央では激しい論争が湧き起こった。

かねてより航空主兵思想を提唱していた人々は、それを見たことか、と言わんばかりに、

「今からでも遅くはない。海軍の軍備を、空母と航

空機を中心としたものに改めるべきだ」

「戦艦などは、今や無用の長物に過ぎぬ」

などと主張した。

一一〇号艦の空母への改装も、そういった議論の中から生じた動きだ。

一一〇号艦は、艦体や機関部を建造している最中であり、兵装を始めとする上部構造物にはまだ手が付けられていない。

今なら、空母への改装が間に合うのだ。

航空主兵主義者の中には、

「海軍が研究して来た艦隊決戦など、今後は起こらない。一一〇号艦だけではなく、『大和』『武蔵』も空母に改装すべし」

「既に竣工した『大和』を改装するのは現実的ではないが、艤装工事中の『武蔵』なら、空母への改装は可能ではないか」

と、過激な主張をする者もいた。

艦政本部からは、

「空母にするにせよ、戦艦にするにせよ、一一〇号艦の竣工までには時間がかかる。巨大な艦を何年もかけて建造したのでは、戦争に間に合うかどうか疑問だ。一一〇号艦は廃艦とし、戦時急造型の中小型空母を多数建造すべきではないか」

といった声も上がった。

最終的には、

「『大和』『武蔵』は計画通り、戦艦として運用する。

一一〇号艦は空母に改装する」

と決定され、大和型戦艦の三番艦として竣工するはずだった巨艦は、世界でも前例がない巨大空母として建造されることになったのだ。

都築としては、一一〇号艦の廃艦案に賛同する気持ちが強い。

戦争となれば、艦の新規建造の他、損傷艦の修理も重要な仕事になる。

横須賀工廠で最も大きな六号ドックを、長期間占有されては、損傷艦の修理にも支障を来す。

とはいえ、命令は命令であり、都築以下横須賀工廠の職員には、一一〇号艦を一日も早く仕上げて出渠させ、戦列に加わらせる責務があった。

「完成の暁には、世界一打たれ強い空母が出来上がりますよ」

渡辺造船部長が、自信ありげに言った。

「なにせ、大和型戦艦の艦体を転用しているんです。装甲の厚さも『大和』『武蔵』と同等ということになります。『加賀』や『赤城』も、戦艦や巡戦からの転用ですが、一一〇号艦はそれらを遥かに上回る重防御艦と——」

渡辺の言葉は、唐突に中断された。

突然鳴り響き始めたサイレンが、声を遮ったのだ。海軍工廠の職員にとり、初めて聞く音ではない。

防空演習で何度も聞かされた、空襲警報だった。

「防空演習ですか？」

「何も聞いていないぞ。抜き打ちか？」

斉尾造兵部長が不審そうな声を上げ、都築も首を

傾げた。

作業員たちも手を止めたまま、不安げな表情で互いに顔を見合わせ、あるいは空を見上げている。

「東部軍管区、空襲警報発令！」

出し抜けに、工廠内のスピーカーから、総務部長黒瀬浩大佐の声が流れ始めた。

工廠の責任者は都築だが、現在は六号ドックの視察中であり、警報を出せる場所にいない。

黒瀬は緊急事態だと判断し、都築の許可を待たずに警報を発したのだろう。

「敵爆撃機の編隊、房総半島東方海上より接近中。敵の目標は帝都の公算大なり。これは演習にあらず。繰り返す。これは演習にあらず！」

束の間、工廠内を静寂が支配した。

二秒ほどが経過したとき、

「作業中止！ 避退！」

艦の内外で、班長の声が響いた。

六号ドックの中は、たちまち騒然となった。

艦内で作業していた者は、次々に艦外へと脱出し始め、艦外での作業者は、ドックの内壁に近い場所に移動し、身を潜める。

都築や渡辺も作業員たちに倣い、ドックの内壁に身を寄せる。

できることなら、自身の持ち場である工廠長室に戻りたいが、その時間はなさそうだ。ドックの底で、空襲が止むのを待つ以外にない。

「何故、敵機が帝都に……？」

「分からん」

茫然とした声で呟いた斉尾に、都築はかぶりを振って見せた。

開戦以来、海軍は本土の東方海上に、綿密な監視網を張り巡らしたと聞いている。

多数の漁船を徴用し、特設監視艇として本土への接近を図る艦艇を見張らせる他、横須賀航空隊の飛行艇や水上偵察機が洋上哨戒を実施し、空からも目を光らせているのだ。

だからこそ作業員たちは、余計な心配をすることなく、一一〇号艦の建造に集中することができた。

にも関わらず、敵機は本土近海に出現した。

こともあろうに、帝都に向かつて来たのだ。

敵の行動が巧みであり、日本軍の監視網をまんまとすり抜けたのか。あるいは、監視網のどこかに穴があったのか。

「敵の狙いはどこでしようか？」

渡辺が顔色を僅かに青ざめさせ、一一〇号艦の巨体を見上げた。

敵機が横須賀工廠を襲い、六号ドックに投弾することを、造船部長は危惧している。

並外れた巨軀を持つ一一〇号艦は、大物を狙う搭乗員にとり、格好の獲物に映るであろうことは想像に難くない。

大和型戦艦譲りの重防御艦も、今はまだ建造半ばだ。艦内に張り巡らされた構造物も、艦内隔壁も、据え付け中の缶や主機も、剥き出しになっている。

このようなところに爆弾を投下されたら、ひとたまりもない。

帝国海軍が、新時代の主力とすべく建造中の巨大空母は、生まれもしないうちに、ドック内で最期を迎えることになる。

(来るなよ、来るなよ、こつちに来るなよ)

都築は口中で、繰り返し唱えた。

敵機が横須賀上空に來ないこと、来たとしても六号ドックには投弾しないことを必死に祈った。

だが――。

「来た！」

誰かの叫び声が、工廠内を駆け巡った。

その声に、航空機の爆音が被さった。

音は急速に拡大し、工廠に近づいていることを示している。

考えられる限りの最悪の事態が、六号ドックと一〇号艦を見舞おうとしているのだ。

「敵機、ドックの直上！」

また新たな叫び声が上がった。

都築は顔を上げ、頭上を見上げた。

初めて見る敵機――双発の中型爆撃機の姿が、都築の目にくつきりと焼きついた。





第一章 房総沖海戦

## 1

「味方艦、右四五度、三〇〇（三三〇〇メートル）、及び右一二〇度、四五（四五〇〇メートル）！」  
 呂号第四潜水艦の司令塔上で、見張員が報告の声を上げた。

「両艦に信号。『我、呂四四』」

呂号第四潜水艦長神玄太郎少佐は、信号員の鍋田実一等兵曹に命じた。

見張員が報告した通り、右前方と右後方に、味方艦の姿が見えている。

鍋田が大きく旗を振り、信号を送った。

返信は、すぐに返された。

右前方の艦は「我、呂四六」と名乗り、右後方の艦は「我、呂四五」と伝えて来た。

時刻は、一五時一四分。

日は大きく傾いているが、海上は明るく、遠方ま

ではつきりと見通せる。

「航海、現在位置は？」

「犬吠埼よりの方位九〇度、九四〇哩です」

発令所に詰めている航海長三好辰雄大尉が、伝声管を通じて返答した。

「全て予定通り、か」

神は、満足の声を漏らした。

呂四四、四五、四六の三隻は、第四潜水艦隊隷下の第三潜水艦隊に所属している。

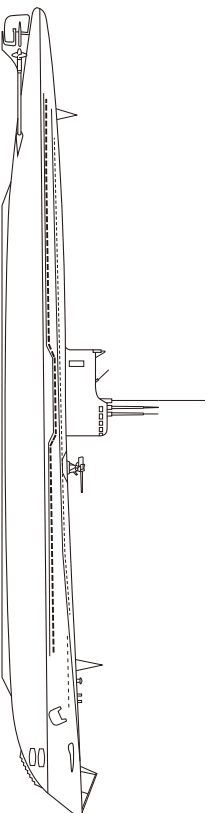
中型と呼ばれる、戦時量産型潜水艦で編成された部隊だ。

海大型、巡潜型、甲型等の伊号潜水艦に比べ、魚雷発射管の数や航統距離では劣るものの、安全潜航深度は同等だ。

伊号よりも艦形が小さい分、音波探信儀に捕捉され難い。

潜水艦の最大の長所である隠密性では、伊号よりも上なのだ。

## 日本海軍 海中Ⅷ型潜水艦「呂号第四四潜」



全長	80.5m
最大幅	7.05m
基準排水量	960トン(水上)/1,447トン(水中)
主機	艦本式二二号一〇型ディーゼル 2基/2軸 4,200馬力
出力	19.8ノット(水上)/8.0ノット(水中)
速力	80m
安全潜航深度	8cm40口径 高角砲 1門
兵装	25mm 連装機銃 1基 2丁
乗員数	53cm 魚雷発射管 4門 61名

日本海軍は、敵艦隊の来寇に際し、航洋性に優れた大型潜水艦を用いての漸減作戦を計画していたが、一方で、中型潜水艦による沿岸、局地防衛も検討していた。その主力となるべく設計されたのが海中Ⅷ型潜水艦である。これは量産試作的意味合いも強く、2隻が建造された。その建造で得られた所見をもとに開発されたのが本艦、海中Ⅷ型である。海中Ⅷ型よりも全長は7メートルほど延長され、発動機の出力を増している。また、機銃も13ミリ機銃から25ミリ連装機銃に強化されている。速力、運動性能、隠密性に優れた万能艦で、局地防衛や哨戒のほか、さまざまな任務に用いられている。また、友邦ドイツより導入した「野伏せり戦法」による通商破壊戦でも、その活躍が期待されている。

何よりも、伊号に比べて必要とされる資材や建造に要する工数こうすうが少ないため、短期間で多数を建造できるといふ長所があった。

現在、三四潜隊は、「野伏せり戦法」の演習中だ。昭和一二年、日独伊防共協定と併せて締結された日独伊軍事協力協定に基づいて、ドイツ海軍から伝授された戦術だ。

複数の潜水艦が一組となつて行動し、一隻が目標を発見したら、無線通信によつて僚艦に知らせる。

その後、仲間の潜水艦と協同して目標を捕捉・攻撃し、仕留めるのだ。

ドイツでは、狼が遠吠えによつて仲間に獲物の発見を報せ、群れむれの力で狩りをするやり方に似ているところから、「狼群戦法」と呼ばれるが、日本では戦国時代、野武士や土民が落ち武者を狙うやり方に倣つて「野伏せり戦法」と命名した。

帝国海軍では、伊号よりも呂号に適した戦術であると評価し、呂号で編成した潜水隊による訓練を開

始した。

この戦術には、通信と航法に高度な技術が要求される。

僚艦に対し、目標の位置、針路、速度を正確に伝えると共に、僚艦からの報告は、確実に受信しなければならぬ。

攻撃予定海面まで艦を持つて行くには、航法の精度確保も不可欠だ。

神艦長の呂四四は、司令潜水艦を務める呂四六からの指示通り、指定された海面に到着したのだ。

「呂四六より信号。『新目標、〈犬吠埼〉ヨリノ方位八〇度、九〇〇埋地点。会合予定時刻、明〇三〇〇』」

司令潜水艦からの新たな指示を、鍋田が伝えた。今度は明日未明の会合だ。

昼間の会合に比べ、一段と難しいが、「野伏せり戦法」をより効果的なものとするためには、夜間の襲撃訓練は不可欠だ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。